
善人的破壊活動～元・引きこもりのぶらり旅～

カスティアエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

善人的破壊活動〜元・引きこもりのぶらり旅〜

【Nコード】

N4995M

【作者名】

カステイエル

【あらすじ】

半ば殺されたような形で寿命を迎え、元居た世界で一緒に暮らしてた家族の元へ帰るために漫画やゲームの世界を行ったりきたりする。そんな話……

ネタとしてタグ以外の作品を使ったりする予定です。

プロローグ 気が付けば死んでいた少年（前書き）

主人公がではなく作者の原作知識が薄いという醜態

助けて！Wiki大先生！！

プロローグ 気が付けば死んでいた少年

場所は日本のとある家の寝室。

そこはまるで中世の貴族の家のようなインテリアの部屋だ。

部屋中な、焦げ茶色の木製のタイルを壁に貼り、床は足音を一切響かせない高級な絨毯で敷き詰められていた。

その部屋に置いてあるのは割と偏った趣向の漫画や、ゲーム、小説が埃を被ることなく綺麗に並べられている。

時間は深夜2時。

ピーー、と静かであるはずの部屋に無機質な部屋の雰囲気と場違いな機械音が鳴り響く。

「午前2時4分7秒……ご臨終です」

その感情の無い、いや押し殺した声と共に一人の医師と二人の助手が深く頭を下げ、彼の家族はドアの前で絶望した叫びと彼の名前を連呼しながら泣き続ける声が屋敷内に響いた。

そしてその2日後、彼の部屋から一枚の手紙とカードの入った封家族は思い返す。あの子は不幸な子供だった……と。

あの子が外で遊んだことが一回でもあったか？

あの子が声を出して笑ったことがあったか？

あの子が顔を腫らして泣いたことがあったか？

あの子が自分の不遇に腹を立てたことがあったか？

あの子が。

あの子が。

あの子が。

あの子が……「いきたい」と思ったことはあったのか？

彼の家族は嘆き、怒った。

「なぜあの子がここまでの仕打ちを受けなければならないのか」と。

〃〃天界〃〃

「……以上の理由から彼、『百瀬^{モモセ} 唯仁^{ユイト}』の魂には我々委員会からも出来得る限りの施しを受けるべきであると、進言します」

そう言った若い男性のその一言に議会に小さなざわめきが生まれる。

「ま、まあ……待ちたまえ。確かに可哀相な青年ではある。犯した罪も、歴代トップクラスの少なさだ。しかし……だ。その程度の人間ならなら探せばいくらでもいるだろう？ 何故、我々が彼だけ特別扱いしなくてはならないのかね？」

議会の殆どの者達の意見代表してたのは、この議会に参加する天界人の中でもかなりの古株で、直に神を名乗ることもできるであろうと噂されるモードウエン議員である。

「モードウエン議員、お答えします。その前に当たり前の事を先に説明させて頂きますが、我々が人間であった頃に犯した罪が一定値未満であるなら天界人となり、それ以上であるなら罪人として煉獄、地獄といった物で双方の方法で贖罪をし、天界で贖罪をし終えた天界人は神として天界人と罪人の管理等をするようになります」

「……だから何だと言うのかね」

「失礼。モードウエン議員、今暫し御静聴を。続きますが、その神

にも格というものがあり、それは地上に産み落とされた瞬間にある神性を最大として、『七つの大罪』傲慢、嫉妬、大食、淫欲、怠惰、貪欲、憤怒を司る彼等の干渉を受けるとその神性が下がって行き、やがて無くなり底に墜ちます。逆に言えば生まれ持った神性が高く、かつ罪も犯すことなく、大罪の干渉を受けずに生を全うすればその者の神格はかなり高いものとなります。」

「……まだ、その講釈は続くのかね？」

肩を竦めながら周りを見渡すモードウェン議員に他の議員も同調し始める。

「はい、すいません。あ、ところでモードウェン議員。初期と最終の神性値を伺ってもよろしいですか？」

「なぜそんなことを言わなくてはいかんだ！」

「いえ、この中で一番神性値が優れていると感じたのがモードウェン議員でしたので。」

一向に話の進まない彼の司会に、モードウェン議員が苛立ち腰を上げ始めたが、彼が上手く窘めて再び座らせる。

「……チッ………初期値（生まれた直後の神性値）は11万4千。最終値（死後に残った神性値）が7万7千！」

その数値を知らなかった議員の十数名は驚き、隣の者同士で囁き合う声が聞こえる。

初期値こそ天界人の平均神性値になる10万3千より少し高い程度だが、最終値が平均の4万2千を大きく上回っている数字にモードウェン議員の神格の高さを議会に参加する議員たちに再認識させた。

周りの反応にご満悦な様子のモードウエン議員は満足げに深く椅子に座り腕を組む。

「流石モードウエン議員です。平均の倍近い数値ですね。さて、話を戻します。百瀬唯仁の話です。彼は生後殆ど外に出ることなく、人生の9割はベッドの上で生きていました。そこで先程の説明になげますと彼の神性値が異常であると言うことです。あらかじめ釈明致しますが、この結果には一切の嘘偽りはありません」

一瞬の沈黙

「初期値186万9千……」

その桁の違う数値に皆信じることが出来ず、彼に抗議の声を浴びせる。

「最終値」

彼のその一言に議会議室が再び沈黙に包まれる。

「最終値………344万5千……」

「なっ……！？344ま「ふざけるな……！！！！神性値は減ることは

あっても増えることなど有り得ん！！貴様、何か細工をしたのか！！！！」

他の議員の声を遮り、モードウエン議員の叫びに近い抗議の声が部屋に響く。しかしそんな空気の中でも彼は飄々と下座の前で佇んでいた。

「はい、本来なら有り得ません。なので調べました。魂の管轄を前世、彼の人生、担当していた神まで全て………そして一つ不可解な物を見付けました。……モードウエン議員、何故貴方が百瀬唯仁の魂に神性値抑制の枷……テンプニルを嵌められたのですか？」

神性値抑制の枷。名をテンプニルと呼ばれ、本来なら堕天使にしか嵌めさせることが許されない代物を人間が嵌めている。

それもテンプニルを嵌めたのは紛れも無いモードウエン議員。その事実には議会はざわめきだし、収拾がつかないまになった。

「はっ！！何故、私がやったと！？どこにそんな証拠が！！」

「証拠があるからこうして議員の皆様を召集して進言したのです。

『1991年5月30日、モードウエン議員の利己的な行動によって負わされたテンプニルによって、心身と神性とテンプニルの激しい拒絶反応、神性値の抑制、及び身体機能低下、生命活動妨害その他9項目の人間性の侵害』を被った百瀬唯仁に最大限の便宜を図るべきではないかと……」

「き、貴様いい加減にしろ！！何様の分際で私にそんな口を開いているのだ！？私は「モードウエン議員。貴方こそ誰に向かってそん

な口を聞いているんだ？」なっ!？」

そう言われて初めて議員たちも不審を抱く。「こんなやつ議員にいたか」と。

基本的に議員の間での交流はないため議員たちは互いに無関心だが、それでも名前くらいは全員分を把握している。

しかし全員がこの議員を知らない。知っているつもりになっていたが、この議員の名前すらわからないのだ。

ならば、こいつは……誰だ？

〳〵 寨の河原 〳〵

賽の河原、一般には三途の川と表現される場所で仏教が発祥の概念であり、親よりも早く死んだ子供に報いを受ける場とされている。そんな河原の砂利の上で仰向けになって寝ているのは、先程まで天

界で話題となっていた百瀬唯仁その人である。彼は瞼を数回しかめると、ムクリというSEが付きそうな動作で身を起こす。

「目覚まし無しで起きた。今日は調子がいいな」

そうは言っても唯仁の目は未だにピッチリと閉じられており、起こした上半身が前後にゆらゆらしている姿からは、とても寝起きがいいようには見えない。

やっと目を開けた唯仁が先ずしたことは肩を上げてベッドの脇にあるはずの小物入れの中の眼鏡を手探りで探すことだった。

「あ……れ？眼鏡、がない」

というよりも小物入れがなく、ベッドもないことに今気がついていない様子なのは唯仁がボケているだけなの不だろうか。

「おはよう」

眼鏡を探すことをあきらめ、ボーっとしていた唯仁は不意に声をかけられた。その声は交友関係が極めて少ない唯仁の知らない声だ。

「おはよう……ございます」

「うん、おはよう」

挨拶し返すと今度は微笑みを添付して返された。これじゃあ、埒が明かない。そう思った唯仁は声しか聞こえない相手に向かって問いかけた。

「貴方は誰ですか？」

「ああ、そうだったね。少し待ってて………よし、おはよう」

ぼやけて見えたのは僕の視力のせいじゃなくて、単に靄がかかっていただけみたいだ。

靄が集束して人型を象り、その後、人型の靄は人になった。^{かたど}

「これでいいかな。君は百瀬唯仁君でいいんだよね？私はカスティエル。性別の概念はないが昔は男だった。気軽にキャスとでも呼んでくれるといい」

「あ、はい。初めまして百瀬唯仁です。僕はここにどういった理由でいるのでしょうか？」

「そうだね。取り繕っても事実に変化はないし……簡単に言うと君は死んだ………寿命でね。」

「そうですか……はい、分かりました」

「そんなに早く納得できることなのかい？」

「いえ、いつでも死ぬかもしれないという心構えはしていたし、ちゃんと手紙も書いて逝けたから……」

そう俯き加減で言いキャスさんの方に向き直ると、どこことなく神々しく感じる服が汚れることも気にせず、深々と土下座するその人の姿があった。

「きゃ、キャスさ「すまなかった」キャスさん……顔を上げてください。顔を、上げてください。お願いですから……」

突然のキヤスさんの行動に混乱していたが、眩くように何度もお願いしてやっと顔を上げてもらい、シミ一つ見当たらなかった服も土色に染まり、陶磁器のように決めの細かい白い肌の顔は河原の土で汚れていた。

「許してくれとは絶対に言えない立場なのは重々承知だ。しかし、それでもこれから話す我々の君の理不尽な死に対する罪の懺悔を聞いていただきたい……」

何を言っているんだろう……この人はつい今さっき「寿命」と言っただけではないのか。

「僕は寿命で死んだんですよね？何を謝ることがあるんですか？」

「全て話そう。その後君、貴方が憤慨することも、我々に報いを受けさせたいと言うなら甘んじて受けよう」

キヤスの話を纏めるとこうなる。

一つ、人間を含んだ全ての生物には、神性値という死後に天界人として贖罪を終えたら後の神としての格を決めるために基準とする単位がある。

二つ、僕にも例外なく神性が備わっていたがその数値が現在の最高神を僅かに上回る程の異常な数値だった。

三つ、神と言うのは神性値のランキング順で、その柱に新しい神が加われれば元々居た神は一つ下の位の柱を担当することになる。

四つ、このまま僕が死ねば確実に最高クラスの柱に就くことを危惧したモードウェンという天界人が、神になるために僕が邪魔だったという利己的な動機から僕の神性値を下げるために、本来なら墮落する天使の神性を抑えるために用いられるテンプレという抑制器具をあるう事か14個も独断で僕の魂に取り付け、186万程あった神性値を5万にまで抑制させた。

五つ、しかし、予想外なことに受肉している人間は本来の僕の正常値の186万に近づこうと魂と神性を適応させようとした。

六つ、それを知ったモードウェン議員が受肉した僕の身体に直接テンプニルを今度はさらに15個も付け出した。

七つ、そのせいで身体と魂、神性とテンプニルの間にそれぞれ拒絶反応が起こり、僕はその反応に死ぬ直前まで原因不明の病として苦しみ続けてきた。

「つまり……僕はそのモードウェン議員の地位と保身のために17年間も血反吐を吐きながら苦しみ、動くはずの身体が動かせず、本来の寿命の65年前に死んだ。そういうことになるんですね？」

「ああ、その通りだ。」

「……」

「君は……何も感じないのかい？」

何も感じない……そう言われて初めて僕が全く怒ってないことに気づいた。

「この場合、僕は怒るべきなんですよね？でも怒れません。

モードウェン議員が憎くない筈なのに、怒り方がわからないんです。どうすれば怒れるんでしょうか？

怒れたとして、僕は何て言えればいいんでしょうか？

怒るということがどういうことかは知っています。ゲームや漫画でも暴言と言うものはたくさん見てきました。

でも、そういうことを自分に当て嵌めても何も沸いてくるものがない

いんです。」

「『大罪』の干渉妨害………！こういうことだったのか。」

七つの大罪の干渉。それはすなわち大罪を司る感情の欠如を意味していた。

己を蔑ろにし、他人に何も感情を示すことなく、最低限の食事しかとらず、異性に魅力を感じず、己に過剰に厳しくし、何も欲しがらず、怒ることもない。

残った感情はほんの一握り。喜びや感謝等といった僅かなものだけだった。

「それで、キャスさん。僕に話を聞かせるためだけに来たんですか？この後は僕はどうすればいいのですか？」

「……本当にすまない。」

「くどいです。本当に感慨を感じないので……で、どうすればいいのですか？」

「君の来世の話になる。」

「来世……ですか」

「先ほどの話に戻るのだが君に嵌められたテンプレルの合計が29個。

貴方はもう身体から解放されているから魂に嵌められているのは14個だがこれでも前例がないほどの異例の数なんだ。

これは始まりの悪魔であるリリースも3個、大罪中最強でテンプニルを最も多く嵌められているルシファーですら5個で留まっている。我々にも解除することはできないが解除方法なら教えて上げられる。解除するには『良い事か悪い事をしてもらう必要がある』」

「……というത്？」

「絶対値と言う考え方があるだろう？基本的にはあれと同じなんだ。善行が＋、悪行が－として、どちらかの100になれば一つのテンプニルを解除できる。

しかし＋と－で違うのは効率。＋が1なら、－は150万分の1という効率の悪さを誇る。

さて、ここで貴方の話だ。本来ならすぐにでも貴方を神の柱としてお迎えしたいのだが……そこでテンプニルが邪魔になったんだ。神に限りなく近い力を持っていたルシファーに解除させないために、その作りは最高神である我等の主にも解除出来ないほどの高等な物になってしまつてね…… 輪廻を巡回させることも神柱を任せることも出来ない。

どうしたものかと考えたときに目に入つたのが貴方の部屋にあった娯楽のゲームや漫画の数々だ。

元居た場所にも貴方からすれば異世界となる現存の平行世界には転生は出来ないけど、アニメなどの世界観を象つた擬似的な世界を作つてそこで貴方に転生できる。

そこで貴方にテンプニルの解除を行ってもらいたい。」

「擬似的な漫画やゲームの世界……ということは仮に僕が主人公とかのキーパーソンを殺したとしても実際の漫画やゲームに何か変化はないということですよね？」

「その通り。そして貴方がテンプニルの解除を完遂できたら改めて転生するか神として最高神、またはその片腕として世界を管理してもらう立場になってもらうかを決めることになるんだ。」

「元居た場所へ帰ることも？」

「ああ、可能だ。じゃあ、ほかに質問がなければ次に移るけど……貴方は擬似的な世界に送られるわけだけど、どの世界がいい？」

「いくつかあるんですけど、これから行く世界だけでテンプニルを全て解除するんですか？」

「いや、君が死ぬたびにここまで戻ってきて新しい世界を再選択できる。一回行った世界でもね。」

ああ、これも大事な話で……いくら貴方が寿命で死んだと言っても、その責は私たちにある。そこで我々は君の魂に加護を与えることにした。早い話が貴方に好きな能力をあげよう。看過出来る範囲で、だがね……そうだな加護を与えられる限界とは、貴方の魂に内在する神性値の器の容量と同義だから……4個位にしておこうか。君の神性の器ならコレくらいがちょうどいい数だ。ちなみにこれはあくまで目安だ。あなたの器に対して、加護というキャパシティが収まればそれでよし。それを超えるようなら幾らかの制限を掛けて容量を抑えることも可能だからね」

「じゃあ、一つ目は『理想を現実に反映させる肉体』がいいです」

「理想を現実に……説明を聞いても？」

「はい、最初は単純に『最強の肉体』でいいかなと思ったんですけど」

ど加減が出来なさそうなのでこういう形にしました。これは例えるなら100メートルを1秒で走りたいと願えばそれが出来るし、逆に頑張っても20秒と願えば頑張っても最速20秒でしか走れない身体になる、と言うことを望みました」

「それは確かに可能だが、極端に強い力を引き出してしまうと身体
の組織が崩壊し始めるから気を付けて。光速で動こうとしたら周り
毎巻き込んで吹き飛ぶだろうね。」

なんかリアルな例え話のおかげで「考え直そうかな」と考えたのは
内緒。

「わかりました。じゃあ、二つ目は『漫画やゲームの能力や技能の
理解・応用が出来る』ようにして下さい」

「あー、それは少し看過出来ないかもしれないなあ……そんな残念
そうな顔をしないでくれ。立場的にも良心的にも苦しいから、本当
に。まあ、絶対出来ないと言うわけではない。君のその願いだと実
質上の『全知全能』になってしまいうからね。容量がどうしても足り
ない。その漫画やゲーム……君が考えた物でもいいから今ここで能
力を決めてくれれば最低限の抑制が出来るよ。だからその目をやめ
てください。貰い泣きしそうになるから」

その後、キャスさんと相談して決めた能力は……

・シャーマンキングの霊媒術と巫術と陰陽術（実体化も可能。媒介
はO・S（B・O・S含み）を象徴するものなら何でもよい。呪禁
存思（蘇生術）はできない。）

・金色のガッシュベルの術と人や魔物の能力（外見の補正がある。）
・鋼の錬金術師の錬金術とその知識（心理を見てないけど見た事に

なっているため、手を合わせるだけで陣の循環できる。魂の練成、人体練成、植物以外の生命練成はできない。」

「ですかね？」

キャスさんが加護で制限したいのはどうやら生命に関するものらしくそれ以外については結構ユルい事が分かった。

「なんというか……ここまでとは………」

無視無視と。

「分かった。では、コレを……」

「……え、って熱っ！……く、ない？」

キャスさんが僕の右手を渡して見せたのは、掌サイズの丸い球体だった。

その球からは断続的に青白い何かが炎のように揺らめいていた。

「えと……コレは？」

「この世の始まりからあらゆる霊が生まれる源であり、あらゆる霊が還る、無数の魂の集合体……」

……てことは、つまり

「つまりコレは『グレート・スピリッツ』、と思っただろうが少し違う。全く同質なもののだが、こちらは『グレート・スピリッツ』と同質ながらにして、個として存在しているもの。あえて言うのなら『グレート・スピリット』とも呼べるか。あらかじめ言うておくが、コレは個の存在であるため、コミュニケーションは一つしか持たない。

そしてこの『グレート・スピリット』は『個であり群としてある』矛盾を成り立たせた弊害として意思を持たない非人格な物となってしまうているが……まあ、いいだろう。コレは貴方の分霊として傍にあり続ける。転生後貴方はこの『グレート・スピリット』を使って、霊を必要とする巫術を扱ってもらうことになるだろう。

よし、じゃあ次いこうか？」

「はい……じゃあ、次はさっきの二つの加護の使用に対しての負担が掛からないように。これで何個ですか？」

「3個。まだ3個だよ……はあ、人間の価値観を甘く見てた、本当に……でも知識に関しては歴史など一部の制限を掛けさせてもらう。」

なんかごめんなさい。

「これで最後ですね。キャスさんが制限したものの以外に加護の制約や原則、デメリットな要素の排除をお願いします」

「……説明をお願いしてもいいかい？」

「特に二つ目の願いに関係するんですけど、『等価交換』の原則をなくして欲しいんです。術を使えばチャクラ、巫術を使えば巫力、呪文を唱えれば心の力を消費します。例をあげれば『術の行使のためには心の力を消費する』といったものですね。そこでこの加護で概念そのものをなくして欲しいんです。これを応用すれば、全ての能力は無限に湧き出る心の力で行使できますよね？これだけでは火力に問題が残りますが、事実上の無限になる筈です。あとは鍊金術も『質量保存の法則』と『自然摂理の法則』を無視できるようにし

たいです。これがこの加護の意図です」

「了解した。」

「なにからなにまでありがとうございました。お世話になりました」

「いや、それを言われると少し困るな。確かに貴方に与えた加護には引かされたけど……。元をたどれば完全に我々に責があるわけだしね。おっと、そういえば貴方はどういう世界に行きたいのか聞いてなかったね。行くといっても記憶を魂に刻み込んだまま転生するから生まれる年代や場所も考えないといけないよ?」

「いえ、キャスさんには責任はありません。悪いのはモードウェン議員です。あと行きたい世界はもう決めてます。ワンピースの世界がいいです。オハラ生まれでニコ・ロビンの6歳年下の義弟になるように。外見、容姿は今後も今の僕と同じ様に育ちたいです」

「お安い御用だ。テンプニルの解除は毎回『5歳を超えてから始める』ということにしておくね。毎回、貴方の5歳の誕生日に解除に必要なアイテムを贈ろう。あとは……生まれて瞬間から意識よ加護

はあるけど、身体能力は普通の子と変わらないから、第1の加護でどうにかするといいよ。羞恥と言う名の拷問を楽しんでくれ」

「……ではまた来世で。」

「はは……そういう皮肉は心に刺さる……では『眠れ』」

議会にて――

「貴様いい加減にしろ！！何様の分際で私にそんな口を開いているのだ！？私は「モードウェン議員。貴方こそ誰に向かってそんな口を聞いているんです？」なっ！？」

そう言われて初めて議員たちも不審を抱く。「こんなやつ議員にいたか」と。

基本的に議員の間での交流はないため、議員たちは互いに無関心だが、それでも名前くらいは全員分を把握している。

しかし全員がこの議員を知らない。知っているつもりになっていたが、この議員の名前すらわからないのだ。

ならば、こいつは……

「これは失礼、自己紹介を忘れていました。私は第3柱『アイテル（ギリシア神話に登場する原初神で、天空神）』を司る柱神、カスティエルと申します。改めて問いますがモードウエン議員、貴方は誰に向かって暴言を吐いていたのかお教え願えませんか？」

今日この日、一人の人間らしい（利己的な）一人の善人が「下の者」となる事になった。

プロローグ 気が付けば死んでいた少年（後書き）

宣誓！！私は報告もなく気に入らない部分はじゃんじゃん編集して
いきます事をここで宣言します！！

チャート1 喋る出番のない子供（前書き）

なんかあれですね。どうやら頭脳派能力バトル≧単純能力バトルみたいな公式が結構な割合で皆さんの間に成り立ってるみたいですよね。

僕としては、あまり考えずに読めるできるだけ単純なものを書きたいです。

読者の皆さんには誤字脱字。文法と用法の誤りや重複など細かいところでもいいので簡単に添削・指導をしてくれると幸いです。
あんまり画面観て打ってないんで……

チャート1 喋る出番のない子供

オハラに生まれて2年が経ちました。

まずこれまでを説明するなら、まず僕は捨て子です。前世の記憶やキャスさんのやり取りは、自我を持ち始めた当初からありましたが、自我を持ち始めたのが最近のことなので「僕が生まれて」というのは、正確に表現するなら「僕が拾われて」と直せます。別にどうでもいいですね。

ちなみに海岸で本を読んでいたロビンが籠に入ってる僕をその日のうちに見つけてくれました。感謝感謝です。でも本は傷まないの？

ロビンと「全知の樹」の研究員たちの総意で付けられた名前は「ニコ・ユイス」。なぜニコかと言うとロビンがじゃんけん大会で優勝したからです。

ロビンも居候の身なので家には連れて帰れず、「全知の樹」全員で僕の世話するようになりました。

そして今日は……

「こんにちは、クローバー博士！ユイスは！？」
吹き飛ばすかの如くドアを開け、開口一番に気にしたことは僕のことでした。

「こんにちは、ロビン。ユイスはあっちでゴロゴロ転がっておるよ」
どうやらロビンが来てくれたようです。僕はこうして転がっていましたが、別にトチ狂ったわけではありません。前世で僕が動けなくなる時のサインは、病気の発作（テンプニルによる束縛）だったため、一度も疲れたことがなかったんです。勘違いしてほしくないので言っておきますが、僕は疲れたい訳ではなく、疲れるまで運動がしたいのです。

「ふふっ、相変わらず変ことしかないんだね！わかった！じゃあクローバー博士、これ借りてた本！」

「ああ、後で戻しておくようにな」

「はあい、じゃあ、ユイスのそこに行くね」

ここで僕、参上！

「ロオビィン！！」

ホントは「ガポルク」で大人になりたかったんだけど発音できずにからくも断念。「ポ」がね。難しいですね。

「第1の加護」の「理想を現実で」しゃべれるみたいだったけどボロが出ると後が怖いから、その加護は殆ど使わずに生きてきました。

「ふふっ、こんにちは、ユイス」

「こんにちは」

……言わないでください。呂律が回らないんです。

「じゃあ、今日もサウロの所に行こうね？」

転がるのを止めてロビンやクローバー博士を見上げていた僕の視点の高さに合わせるように四つん這いになったロビンが

「でれし、し、し、し、し」

「あははっ、デレシシシ」

そんなやり取りをしながら、ロビンは僕を抱えて立ち上がる。

「クローバー博士！ユイスと遊びに行つて来るね！！」

「ああ、行つてらっしゃい。考古学者になったからといって、遊んでばかりではダメだぞ。いいかつ！？そもそも考古学と言うのは……」

また始まったよ。駄菓子菓子、僕は攻略法を編み出しました！

「ジイジ」

「絶対に歴史は覆ること……おお、ユイス。どうしたんじゃ？」

クローバー博士はロビンの次呼んだ人だ。それまではあまり僕に構つたりしなかったが、「ジイジ」と呼ばれて以来、僕に構つてくれるようになりました。

今もロビンの横にしゃがみこんで、僕に向かってやわらかい微笑を見せてくれた。

「じゃあ、クローバー博士、わたし行くねっ！」

その期を見計らつたロビンは逃げるようにドアを開けてサウロが拠点にしている森へ走る。

「できたでよーーーーっ！！」

「……」

僕たちは今森の中にある小さな広場（サウロのせいでそう感じるだけ）にタムロしている。

こうして集まるのはサウロが流れ着いてから殆ど毎日のことで、行かなかった日はロビンに用事があった日だけだ。サウロが流れ着いてから1カ月くらいは、怪我を治すことに専念していたみたいで、今はもう完治したらしく3週間くらい前からこうしてイカダを造っているようだ。

「イカダ!! デレシシシシ」

「イカダ! デレシシシシシ!」

「おお、ユイスも嬉しいのか? デレシシシシ」

「じゃあ」

「!」

「……もう行っちゃうの?」

「何だで〜。明らかさまに淋しそうな顔して!」

「そういや旗でもつけようと思うとったところで! も少しここにおるでよ! デレシシ!!」

「……」

「デレシシシ!」

「オルビア」

「!?!?!」

「サウロ……!?!」

サウロは10秒ほど考え込むようにどこを見るでもなく仰向けに倒れた。

ロビンの親が「空白の100年」を求め、ワシが海軍の監獄の脱走の手助けをしたあのニコ・オルビアである、と驚いているんでしょ
「じゃ、じゃあ！ユイスもでか！？」

僕を抱えて座るロビンは何を焦っているのかわからない、といった顔で僕を一瞥した後には答えた

「ううん。ロビンは海岸で捨てられてるのを拾ったの。島に前まで居たデニスさんって人が同じくらいの日に住なくなっちゃたから、きつとその人の子供よ？」

「そうか。……！！じゃあ、まさか……ここは『オハラ』と言う島では！？」

「うん」

そうか、いつの間にかこの日なのか……今思えば「アンサートーカイ」で割り出せばよかったんだけど頭になかった。

サウロがロビンにこれから起こる事を色々教えてるが僕はもう何回も読んだから知っている。今なら読まなくても大体分かる。

さて、今回の政府と海軍の制裁からオハラを救うにあたって、気を付けるべきなのは「バスターコール」「クザン中将」この二つだ。感知能力で反応するのは島内にはロビン、外の50海里内には6つの悪魔の実の反応がある。

そしてもう、付け焼刃だが先手はこちらのものだ。

行け……………スピリット・オブ・ファイア！

（side） Robin

急がなきゃ、急がなきゃ！

ユイスを「腕」で抱えてクローバー博士の居る『全知の樹』まで走っている。

銃を持った女が町にいるらしい。海軍の人かな？ ならなおさら急がなくなっちゃ！

博士！ みんな！ ……お母さん！！

わたしが町に入ったあたりから、ユイスが暴れだした。ほんとはずぐにでも帰りたいかったけど、一旦足を止めた。

「ユイス、どうしたの？」

「ロオビーン！」

そう言ってわたしの向かっていた方向を指差し、わたしの名前を何回も呼ぶ。

その先をわたしも見ると、ユイスの指は銃を持った白い髪の美人な女の人を指していた。

あの人が海軍の人？

でもユイスが何であの人をロビンと呼ぶの！？

ユイスは変なことしか真似しないし変な遊びしかないが、賢い。クローバー博士以外の人の名前を全員暗記しているのだ。百人以上居る研究者たちを、全員分。クローバー博士はジイジと呼ばれることに十分満足してるみたいだけど……

ユイスのその行動でわたしは一つの仮定が立てられた。あの人がサウロの言ってた「オルビア」なの？

もしかしたら海軍かもしれないし、海賊かもしれない。それでも確かめないわけにはいかず、わたしは女の人の前に立ちはだかった。

手を開いて待ち構えていたわたしに気づいた女の人わたしの前でしゃがみこみ、顔に焦りの色が見せながらも優しい顔で話しかてくれた。

「どうしたの？」

「わたし……わたし……」

「ごめんなさい、私ちょっと」わたし……ロビン……です」……えっ!？」

「わたし! ロビンです!! お母さんの名前はオルビアって言います!」

そう言うと女の方はわたしの顔を撫で、悲しそうな表情のまま口を開いた。

「……っ!……ごめんなさい、人違いよ」

その言葉を皮切りに、女の方は銃を持って逃げるように再び走り出した。そして呆然としていたわたしも急いでその後を追う。

あの人は間違いなくオルビアだ……わたしのお母さんだ!!

先ほどまで騒いでたが、今はすっかり大人しくなったユイスを抱え直し、わたしは来た道に戻った。

森を抜け、貿易船の船付け場に停船している船の前にお母さんはいた。銃を今にも落としそうなくらい軽く持ち立ち尽くすその姿は、後ろからでも呆然としてるのが分かった。

「お母さん！お母さんですよね！？」

わたしの声に反応してお母さんは振り返る。

「ロビン！？……あっ！」

返事をしてお母さんはバツが悪そうに顔をしかめる。やっぱりこの人はお母さんだった！この人がわたしを生んでくれた人……この人がわたしのお母さんなんだ！！

クローバー博士のところへ行けば研究者の皆やユイスがいる……でも家へ帰ればまた独り。この人をわたしのお母さんと確信してから気づいた。わたしは寂しかったんだと。これまでのわたしは孤独感が強すぎて淋しさが麻痺していたんだと。誰も居ない家でわたしは泣いていた。でもその涙が何故出てくるのかが分からず、止めようとしても止まらず、いつもボロ雑巾のような布団にそれが自然と止まるまでわたしの涙を吸わせていた。何故、今になってお母さんがこの島に戻ってきているのかは分からないが、もし……もしこれからずっと一緒にここに、わたしと一緒に居られるのなら、わたしは淋しくて涙を流してしまうことは無くなるだろうか。

でもお母さんはしまったという顔をして顔が辛そうに歪む。お母さんはわたしに会いたくなかったの？

「おかあ……」

それを問おうとお母さんと呼びかけたとき、わたしは理解した。なぜお母さんが呆然と船の方を見ながら立ち尽くしているのか。

あれは……何？

まるでお話に出てくる赤い子悪魔のような生き物が「何か」を燃やしている。

燃えているのは……船と……人？

それを理解すると、わたしの身体が震え始めた。

船を燃やし、逃げる人を、抗戦する人を燃やす。それでいてあの何も考えていないような無垢な顔がよりいっそう恐怖を引き立てた。

1分もしないうちに停泊していた船は燃えてなくなり、そこにいた人たちも跡形もなく消え失せた。

赤い子悪魔はわたしたちの方を一瞥した後、唐突に居なくなった。

赤い子悪魔を見て怯えていたわたしを見たお母さんが、ユイスごとわたしを抱きかかえてくれた。

「大丈夫よ……私達たちの敵ではなかった……みたい。それにしても大きくなったね、ロビン」

お母さんが無理に赤い悪魔の話題から遠ざけたのは分かっていた。でも今は、腕に抱えるユイスとわたしを抱きしめてくれているお母さん——

「うん、うん！！わたしね考古学者になったんだよ！ユイスっていう弟が来て、ほらこの子だよ！」「こんちゃ」

「ふふふっロビンが考古学者？すごいわロビン！」

——その二人がいることが何よりも幸せだった。

「こっち来てお話ししょ！？サウロとわたしとユイスだけの秘密

基地があるの!」

「サウロ……海軍中将の!?!なぜこの島に!?!」

「うんとね、足に怪我をしてこの島に流れ着いてたのをわたしが助けたの」

「そう……彼も生き延びたのね」

「早く行こうよ!?!」

「ロビン!無事だったか!?!心配したでよ!?!……それにオルビア!?!……おめえもよく無事で……」

「命からがらだったけどね……でもなぜあなたがこの島に?」

「デレシシシ!何の因果かよ……!!海で遭難してもうて浜辺でロビンに助けられた。」

「ね、わたしの言ったとおりでしょ!?!」

「デレシシシ」

ユイスは本当にこの笑い方が大好きなんだなあ。いつも見境なく真似をしている。

「そんなことより政府の船はどうしたで!?!」

「そうなの!!聞いてサウロ!赤い子悪魔がね、悪い人たちをやっつけてたの!」

「……どういうことでよ!?!」

「私も見た……信じられないけど、ロビンは嘘を言ったりしてないわ。本当に赤い子悪魔みたいなのが政府関係の人間と船だけを燃やしたら突然消えたの」

「オルル〜ビ〜ア〜」

突然、ユイスが声を上げた。

それにしてもこの子、本当に賢い。たった2, 3回名前を聞いただけで初対面の人の名前と顔を一致させている。

そんなわたしの考えも知らずに、ユイスは嬉しそうに海に手を振ってる。

「「「え?」」」

ユイスが手を振ってる先、そこにあっただのは消えたと思っていたさっきの赤い子悪魔が大きな悪魔となって、島と逆方向に見える船を燃やしつくしながら、それを眺める姿だった。

＼Side＼H u y s

どうも、最近「デレシシシシ」しかセリフが与えられないユイスです。

ロビンが町に向かっている間、僕は「スピリット・オブ・ファイア」を実体化させて接岸地帯に待機させておきました。キャスさんが粹なことをしてくれて、シャーマンキングの作中登場の持ち霊を巫力で擬似的にO・Sとして外見、能力共に限りなく近いモノの具現し、それを霊体化・実体化させることを可能にさせてくれた。その後はオルビアとロビンの見た通り。

政府の船とスパンダイン含めた役人全員を焼いたからバスターコー

ルは発動しないし、ロビンに接岸地帯に連れて来られた後に、クリアの第2の呪文「ラディス」という消滅呪文で「ゴールデン電伝虫」を消滅しておきました。ほめてほめてー

まず第一の危機を免れ、流されるままにサウロの所に連れて行かれると、それと同時にバスターコール発動を待つクザン中将等の海軍本部中将5名率いる大型軍艦10隻が、オハラの手合いに到着したことをザルチム感知能力で知りました。

とりあえず軍艦だけを破壊しよう、ということではつつり引火……即ち放火してやりました。

船底にも火が回ったみたいで7隻くらいは沈み始めてます。さらに6隻の船は火薬庫にも火が回ったみたいでリアルな爆発シーンを見ることができました。

海の一部がクザン中将によって凍っており、そこに10隻の軍艦に乗船していた兵隊の殆どがそこに避難しています。

残った3隻の軍艦でその人たちを回収して撤退していき、今回は何とかやり過ごすことが出来ました。

とりあえず、これでスピリット・オブ・ファイアに役人虐殺と軍艦襲撃の罪で賞金がかけて、箔が付く。「億」単位まで行くかなあ……

あちら側も今回のバスターコールも断念せざるおえなくなって撤退させられたし、国家戦争クラスの軍事力を率いて来た軍艦が殆どお釈迦にされている。これで次の準備までの猶予が暫く出来るはずだ。

しかし次は「この程度」では済まないだろう。次は高確率で大将クラスを投入したやり方で攻めてくるだろう。まあ、実力的には問題

ないと思うけど……年齢的に不自然だからアウトだ。

最悪の場合、スピリット・オブファイアを「オハラが復活させた古代兵器」とデマを流して、オハラを全世界から孤立させられる可能性も捨てられない。

これからオハラはどうするべきだろう。政府も海軍も島民に触れることなく撃退してるから、島の中でのクローバー博士たちの風当たりは変わらないだろうけど……

徹底抗戦。大陸でなら可能だったかもしれないが小さな孤島なんて物資を断ち切られれば投降するしかなくなる。

ごまかす。一番楽だがあちら側が飲み込むことはないだろう。原作では「知りすぎた」クローバー博士が銃で撃たれてる。現状としては既に手遅れだ。

オハラにとっての最善の解決策は何か？その疑問に「アンサートーカー」は答えてくれることはなかった。

それから海軍世界政府からの接触はなく、不気味なまでに静かな7ヶ月が経過していた。

そして海賊王が死んだ日、僕はついに3歳になった。

チャート1 喋る出番のない子供（後書き）

■答えを知る者……アンサーカー「金色のガッシュベル」の主人公の一人「高嶺清麿」が臨死体験の後、会得した「どんな状況や疑問、謎でも、瞬時に『答え』を出せる」能力。

■ガポルク……同じく「金色のガッシュベル」登場の魔物「キャンチョメ」が使用するゲームオリジナル呪文。第1の術である「ポルク」の「姿を変えたモノの能力を伴うことが出来ない」という欠点を解消した術。最初はこれで大人になって授乳と言う恥辱から逃れようとした。

■スピリット・オブ・ファイア……「シャーマンキング」でラスボスだった主人公葉の兄「麻倉ハオ」が持ち霊としていた炎の力そのものが具現化した五大精霊の一つ。小悪魔と形容されていたのはSOFのヒトダマモードになった姿をO・Sで姿や能力を再現したものである。その為、SOFに自律性はなく、完全に僕の意味と命令によって活動する。

■ラデイス……「金色のガッシュベル」のラスボスのクリアの「消滅」の力を持つ初級呪文。これの耐性は硬度ではなく強度次第なので、ダイヤモンドなら楽勝で消滅させることが出来る。

チャート2 間接的に賞金首になった子供（前書き）

この話を書き始めたのは3ヶ月前ですが、話の落とし方に今でも不満がありますが、催促されちゃったのでまあ、いいや的な気持ちで次行きたいと思います。

NARUTOとSEEDも書いてみたいなあ、と思ったりしてます。

チャート2 間接的に賞金首になった子供

この7ヶ月間、オハラに政府から何の接触もなかった理由が分かった。

「フワフワの実」の能力者で、「空飛ぶ海賊」と名高い「金獅子のシキ」が、自らの足を犠牲に大監獄インペルダウンから脱獄してみたのだ。

彼は、あの海賊王「ゴール・D・ロジャー」と凌ぎを削り合うライバルで、ロジャーの処刑に憤慨して単身マリンフォードに乗り込んだ勇猛果敢な男による史上初と言えるLEVEL6（原作知識）の監獄から脱走……

この事実は世界を震撼させ海軍、政府共にその男の行方を血眼になって探した。

そして現在に至るまで政府とオハラの硬直していた関係が、今日この日を以って解かれる。

そしてこの7ヶ月で、いつの間にか僕は3歳になり、ロビンはつい最近9歳の誕生日を迎え、今日に至る。

これまでに原作とは少し色の違う話になってきました。

まあ、なんと言ってもオルビアが生きてるということ。

僕とオルビアの存在はロビンの精神的にも大きな支柱になってるよ

うです。

気が付くと、ロビンはマザコンとブラコンが合わさったファミコンにレベルアップしていました。

7ヶ月前、僕と義母と義姉であるオルビア、ロビンと共に再びオハラで暮らし始めました。

空き家だった家を貰って、オルビアと一緒にロビンを引き取りに行った時に見せた弟夫婦の驚きようと言ったらありませんでした。

ロビン本人の口からは言いにくいだろうから、全員がいる前でロビンがどんな虐待されていたかを事細かに説明すると、オルビアは深く一礼した後、弟の顔面に拳を入れ、続いて義妹の頭に上段後ろ回し蹴りをこめかみにプレゼントする。

ロビンはいきなりのでかなりビックリしていたが、僕は「知っていた」のでお腹が痛くなる程大爆笑するくらいで済みました。

え、なんで敬体になってるか、ですか。生まれ変わって心機一転と思っただけですが、性に合わなかっただけです。

実は先週、「金獅子のシキ」の大規模な搜索もある程度沈静化し、ついに僕の「スピリット・オブ・ファイア」の首に賞金が掛かりました。

その額なんと2億8千万ベリ……予想の上斜め上にズッコンです。初頭額としては前代未聞の額だ……と思う。

一般には政府の役人を千人以上殺したとか、軍艦7隻を沈めたと実力を危惧した、いうより動機が回ってるみたいだが、実際は「バスターコール」という儀式を阻害したということに重きを置かれた額みたいです。

因みに異名は「鬼火」。

一応、炎熱系の悪魔の実を食べた巨人族として扱われてるみたいで、能力は図鑑にも載ってない新種の実ではないかと囁かれている。

名称不明と言うことで手配書には異名の「鬼火」の二文字と、オハラの海をバックに膝から上を写した写真を世界中にばら撒いた。

ここでセンゴクに一本取られて、センゴクは「鬼火」の潜伏所在を西の海と公表して、討伐、捕虜を成功させた者は海賊・賞金稼ぎ問わず「王家七分海」と同等の権利を受託させる、と全世界に公布しました。

もし、自衛能力もなく、島そのものが文化みたいなこのオハラに節操のない海賊やらが現れたとしたら、僕は自衛のために「スピリット・オブ・ファイア」、僕の能力がどうしても必要になるでしょう。高望みはしないが海賊やら賞金稼ぎやらが「鬼火」を討伐できたら、それはそれで御の字。

初頭額で3億近い懸賞金が掛かってる奴を討伐しようとする海賊は、皆揃って億越えの力のある奴らばかりになると考えられます。よって、もし失敗したとしても有力な海賊が纏めていなくなれば公開処刑をできなくなるのが惜しまれますが、結果として政府と海軍、双方に満足のいく粛清が出来ますし。

そしてどちらが生き残っても「鬼火」もしくは「オハラを縄張りとするする凶悪な海賊」を殲滅するために「バスターコール」を秘密裏に再び発動させる大義名分が生まれます。

その後、海軍で討伐したと発表し、オハラは海賊の手によって滅び、その海賊も全て逮捕したとでも言うっておけば一般人は深い関心は持たないでしょう。

本当にこんな穴だらけな作戦を「智将センゴク」が考えたのかは流石に「答え」がでなかったのですが、ここが田舎の島で、「オハラ」であるというだけである程度の不確定要素も排除されてしまうのですよ。あの大仏め……

それから一週間経ち今日に至るまで、これまで調べ上げてきたことを面と向かって政府に公表しようとしてるクローバー博士らに直談判を続けた結果、オルビアとロビンが今日、島からの追放されることになりました。

二人はその決定にももちろん猛反対。その決定は、僕たちがこの島にとって有害な存在であるからではなく、僕たちの意思に関係なくこの島から追い出すことで政府から逃がすための口実だと分かっているのだから。

しかし、それは遠回りに博士たちの未来を物語っていました。博士たちは戦うつもりなのでしょう。そして……。

そんな甲斐もなく翌日、本気で籠城も考えたらしいが結局、大人しくここから出ることになった。

そして時間はその日の港場に移る。

「では……………オルビア、ロビン、ユイス……………達者でな」

人徳のせいもあってか、僕らの見送りに来てくれたのは「全知の樹」の関係者だけでしたが、それは言うが易し……………用法違うか。

まあ、研究者の全員が仕事そっちのけで見送りに来てくれました。ロビンは涙ぐみながら、オルビアは哀しんでも躊躇ってるともとれるような表情を崩すことないまま「最期」の挨拶をして回り、色んな本や食べ物等をあげたり貰ってました。

なのに僕は、飴、果物、絵本。

いや、わかるけどさ。こっちではまだ41ヶ月しか生きてないけどさ！！……………もう、いいや。皆の笑顔が最高のプレゼントさ！！

……………や、やめて！このタイミングで頭撫でないで！

二人が貰った荷物を小船（三坪位）に乗せて乗せてを繰り返しているうちに、視界に違和感を感じました。

視力を一時的に発達させ、水平線の辺りを注視すると2隻の船を確認できます。

帆を張ってるから船の持ち主がどういいうやつかが分かりました。

どちらの船の帆にも、黒字に血を滴らせた狼の面の骨。それは間違
いなく海賊のモノでした。

運の悪いことにその海賊、世界政府に反抗したり天竜人を殺したり
といった事は流石にしていけないが、それに系統しない犯罪には一通
り手を出しているようです。

島に降りたらなんとなく占拠し始めるタイプの海賊だという「答え」
が出ました。

くうっ、油断してました!!

感知能力で島を中心に30Km圏内の様子を調べてみました。

最悪です……圏内には少し離れた距離、多分乗艦する船が違うので
しょう。7つの悪魔の実の能力者がオハラに向かってきていること
を今更知りました。視力を強化して見ると、海賊船が二隻、距離を
開けた後方には軍艦が17隻。

どうしよう……海賊船の方はオハラを目の前にして油断してるのか、
大したスピードは出てない。しかし、軍艦の速度がとんでもなく速
い。

この調子だとどちらの船も1時間で射程範囲に入ってしまうそうで
す。

ここで海賊船を落とすにしても追い払うにしてもこの島に海賊と対
等以上に話せるだけの實力を持っている人間はいない。

前提としての説明となりますが、制限がほぼなくなったことで、先

日はシャーマンキング以外の作品のモノでもO・Sとして外見、能力共に限りなく近いモノの具現に成功しましたが、メリットでありデメリットであるのが「持ち霊を必要としない」ということです。持ち霊は必要としないし巫力は心の力が代用でき、かつそれは無限と同義。象徴するものがあれば、五大精霊でしょうがボルシャック・ドラゴンでしょうが何回でも出せます。えっへん。しかし、逆に霊がない自分自律行動が出来ないため、繰り人形のように一挙一動を僕が任意で活動させなくてはならないのです。

よって、スピリット・オブ・ファイアを仲介して交渉を行うという手段を選べない現状としては、あの海賊を島に近づく前に撃退する必要がある。だが、海軍船が近すぎる。一度ならず二度までもオハラ近海で海賊や海軍船を沈没させればスピリット・オブ・ファイアとオハラの関係を現状以上に勘繰られるだろうし、これ以上抵抗したら被害はクロバー博士らだけじゃ済まなくなります。

しょうがない。最初に考えてすぐ却下したことなんだけど……やりますか。

「ねえちゃん!! 僕、廁!」

トイレやオシッコという単語を使わないのは敢えてのポリシーです。

返事を聞くことなく茂みに突っ込んで誰にも見付からないようにし

やがんで隠れます。

護る、護る……「よし……『ディマ・ブルク』」

その呪文を唱えた直後、僕の周りには3人の「僕」が現れました。

僕の扱う金色のガッシュの術と「第5の加護」の間にはリミッター基小さな穴があります。この「ディマ・ブルク」のような術です。原作での本来のこの術なら最高8体のまでの分身体を実体で出せる、という術でしたが「第5の加護」で8人という人数制限をなくし、単騎での攻撃力、耐久力をナチュラルで「テオ」級並にまで強化することが出来ました。しかし、ここからが小さな穴で、例を挙げるとなら怒りや憎しみを攻撃力に換算する「チャージル・サイフォドン」のように術発動のために「思いの強さ」によって左右される術は無条件にリミッターを外すことが出来ないのです。では、こういう条件が科せられているか？それは僕自身が特定の感情を増幅させることです。僕はこの「ディマ・ブルク」の制限を外して唱えるために「大事な人たちを失うことへの恐怖」と「失わないために護る覚悟」という感情、思いを強く持つ必要がありました。僕はこういった特殊な条件化やコンディション、精神状態で性能が大きく変わる「精神状態依存型」とでも言いましょうか。このタイプの術を使いこなすために自己暗示のトレーニングをしてきました。余談だが、「シン」級の術は殆どがこれに該当するため、あまり乱発は出来ません。「第1の加護」でも精神疲労を健常体のままで解消する理想の「答え」は分かりませんでした。

僕がまだ乳児期と真ん中の子供で、かなり行動に制限があった時から瞬間的に様々なイメージをすることを訓練して来たからこそ、今は十秒弱でのリミッター解除に成功してますが、リミッターどころか発動もしなかった最初の方なんて目も当てられなかったものです。

とりあえず分身体2人は茂みに隠れさせてもう1人は港場へ戻らせます。2体は連絡係兼保険です。

それから僕は瞬間移動で「全知の樹」の前に飛びます。

何を……ですか、証拠隠滅ですが？

堂々と玄関扉を開けて中に入る……だって誰も居ないですし。ゴームの空間能力を使って異空間の中に倉庫のようなものを設けて、再び「ガポルク」と「ディマ・ブルク」で300,000人の大人になった僕を作り、偽者たちと一緒に蔵書や資料、ポーングリフ等を詰め込んでいきます。

全員僕だから能率もよく、十数分程で万単位で置いてある蔵書や資料は全て僕の中に納まりました。

ちょうどいいタイミングで茂みに隠れていた分身の一人がこちらに飛んで来ました。

どうやら港場に居たオルビアやクローバー博士らも海賊船が島に来ていることを知ってしまった、ということらしいです。

ということは海軍の軍艦も既に目と鼻の先程しかないでしょうね。

ロビン達の下に残る僕以外の分身体を解除させ、瞬間移動で先程まで分身体が隠れていた茂みに飛びます。

茂みの中から皆の居るところと海賊船のある方向を見ました。

「なんだ、意外と距離開いてるじゃないか」

少し拍子抜けしつつももう一度大人の姿に化け、瞬間移動で大きいほうの海賊船に再びドロンドロンです。

「こんにちは」

星や四分音符が付きそうなトーンで中々業物の刀を研ぎながら見張りをしていた船員に話しかけました。

振り返った海賊は、顔こそ肌色だがまさに魚人のような顔持ちで訝しげに僕のことを凝視してます。

顔こそ肌色だがまさに魚人のような顔持ちで……

魚人のような顔持ちで！？

……はっ！？ 混乱してしまいました。

魚人も睨みすぎて梅干し食べたときのすぼめたような表情になっています。

「おはようございます」

「おうす……じゃなくてなんだお前。後ろの船の奴か？」

喋るために口から外した懷紙をまた戻して、砥石の微粉末を打つ姿は、どこことなく様になってます。

「ごめんね、『リグロン』」

ゆっくりと肩の高さまで揚げた掌からフック付きの4本のロープが、魚人（仮）に絡み付き海に放り投げます。

イチ人間としては良心が痛むので、刀は海に落とさず、空間の狭間に入れておくとうまいでしょう。

魚人（仮）は海上8m程の高さから落としたので、全身鞭打ちで済むだろうが、この件に関わることはないでしょう。

「さて……『シン・ポルク』……と、こんなもんですかね……」

「シン・ポルク」で化けてのは先程のなんちゃって魚人。

変身するだけなら「ポルク」、もしくはその上位呪文に当たる「ガポルク」を使うだけでいい。むしろ、武力解決で済ませるなら必要ないと思えます。しかし、今回の作戦のコンプセットである「オハラで対処できるまでに弱らせる」としては、僕が直接手を下すと帰って不自然なのです。

……はあ、初めて聞きましたか……初めて言いましたか？

話は戻ります。それによって僕は、「オハラを占拠するために来た」海賊と言う印象を「遭難の果てにオハラに行き着いた」海賊という

もの帰ることにしました。

何食わぬ顔で甲板のほうへ向かうと、そこには把握していた人数が殆ど全員が揃ってます。もちろんその中には船長もあり、能力者は二人確認できました。いない数名は操舵手とかの裏方の人達でしょう。二人とも能力自体はたいしたことはない「超人系^{パラミシア}」だが、凡庸性はそれなりに高そうです。

簡単にイメージトレーニングしてから船首に駆け出す。

僕はバタバタと船首に登って、甲板に居た全員の気を引き、「シン・ポルク」で化けたなんちゃって魚人の姿を甲板にいる全員に視認させます。

イメージし、誘致したのは虚無の空間。

音を発せず、温度も光もない、「空間」と「時間」という概念のみが残る空白の場所。

この空間のオーナーの僕だから分かりますが、状況が呑み込めないまま虚無の空間に叩き込まれた海賊は、気絶することも許されず船長などの有力者も含め音が断絶された世界の中で狂いながら叫び続けています。そんな空間の中で僕は胡坐を掻きながら渾身のでこピンを1回を炸裂させ（特に意味はない）、空間内にいる僕を除いた全員に「全身が骨折するまで殴られ続けた」という信号を送り、心身ともに極限まで追い込まれていることにしました。

あまりやり過ぎて精神崩壊やショック死されてもこっちの後味が悪いので、術行使から10秒ほどで即座に解除し、本船の少し後ろを走っていた同じ海賊団の船にも同じ事をする。

瞬間移動で茂みに戻り「デイマ・ブルク」の分身体に茂みに来るよ

うに命令をして、先程発動させた「ディマ・ブルク」の分身体は全て消します。

その後は、何食わぬ顔でロビンの腕の中に納まり、「全知の樹」に避難しなかった一部の研究者と僕ら犯罪者ファミリーズは数分で到着することになる海賊の到着を待ちました。

その後は僕の想定通り、オルビアの指揮下で全員の捕縛が行われ、能力者に関しては海楼石のがなかったため、座ったときに首がはみ出る程度の桶に水を満たして能力と身動きを封じます。

とりあえずこれで海賊は鎮圧された。後は僕が少しばかりコナソ君をやれば予定通りに事は進むでしょう。

「あれー！？ロビン、あれなあに？」

そう言って指差すのは横列隊でオハラに向かう17隻の戦艦。

ロビンを初めとしたここに居合わせる全員が僕の指差す方向に目を細めて凝視します。

しかし、ここは学者の弊害、近視になりかけててあまり遠くは見えないようです。

僕は公式の場で戦艦を見たことはないから「あの船なあに？」位しか言えないのが少し歯痒いです。

それから数分したらオルビアが戦艦を確認して、全員に伝えます。オルビアの言葉を聞いたクローバー博士が数人の学者を「全知の樹」に走らせ、章句隠蔽をさせる指示を出しました。一応無関係の僕が目の前に居るのに全く隠すことなく指示を出しているのは、子供にはまだ分らないと思われるのか、もしくは純粹に動揺してい

るでしょうか……

海軍の軍艦は沖合い、つまりバスターコール射程範囲に配備され、船と船の間から一隻の小船がオハラに近づいて来ました。

建前としてポーネグリフ、及び「空白の100年」を調査した容疑に対する真偽を確認させるための役人が来るのでしよう。ここで仮に役人を殺したりしたら真偽がどうであってもバスターコールが発動されるだろうからそれはNGです。

「答え」を知ってるとはいえ、3歳とちよつとのガキが大人相手に論破なんてことしたらここに居る全員に変な疑念が生まれてしまうから歯痒いがここは大人任せ……………早く大人になりたあい!!（べム風に）

着岸して船から下りてきたのは数人の黒服の役人と、「正義」の二文字を背負ったコートを羽織る将校クラスの海軍が10名程。結構本気ですね……………

「このオハラの研究所に大犯罪であるポーネグリフを解読したという疑いがかけられている!!これより島全体の徹底的な捜索が行われるため、学者及び研究者の身柄をここで拘束する!抵抗した場合は公務執行妨害として現場にいる我々の判断で処遇を判断する。事の真偽が判明されるまでは諸君らに危害を加えることはない。これより「全知の樹」での捜索を行う!ここには数人を残していくが反抗したところが判断した場合、諸君らに何があったとしても我々は一切の責任を負わない、とだけ『警告』しておく……………では「大変だ!クローバー博士!!」こいつもオハラの学者か!?貴様、両手を頭の後ろまで上げてそのままうつ伏せに横たわれ!」

森から出てきたのは先ほどの海賊襲来のように「全知の樹」に避難

した30代の男性学者。

「全知の樹」に研究財産がかけらも残っていないことを知ってここま
で走って来たのだらう。予想していた時間より5分ほど遅かったが、
ある意味ジャストタイミングだ。

「はあ、はあ……『全知の樹』の、『全知の樹』の本も、資料も全
部……全て消えた!!」

役人の指示に全く耳を貸さず、あった出来事を独白する学者。驚い
てるのは学者だけではなく、今まさに「全知の樹」へと足を運ぼう
としていた政府関係者全員も息を詰まらせ驚愕していました。

資料が消えたということは、オハラを学者を拘束、処刑するための
唯一の物的証拠が消え、同時に大義名分も潰えたと言うことと同義。
残っている証拠は、全滅したオハラの探索チーム唯一の生き残り……
後にサウロ元中将の脱走して足取りが途絶えたオルビア。そして
彼女たち探索チームが所持していた遺品や食料のみ。

しかし、これらはあくまできっかけに過ぎず、オハラの学者を処刑
する程の決定打にはなり得ないでしょう。

その学者の言葉を聞いた役人らは、格好も付かないような慌てぶり
で森の奥へと駆け出していく。クローバー博士達もその目で確認し
たい衝動に駆られているようで、胡坐を掻いたクローバー博士刃の
膝に当てた手が小刻みに震えていました。

ここで再びコナソ君（空気読まないVer.）を降臨させます。

「まだお船乗れないの？」

左右の手でロビンとオルビアの服の裾を引っ張りながら愚痴るよう
に話しかけました。

その言葉で混沌とした意識を覚醒させた学者の数人が僕の方を見つ
めます。

「お役人様……お願いがございます」

クローバー博士は意を決した、という顔をして口を開きました。

「……なんだ？」

普通なら無視して暴行を加えられるようなことをしているにも拘らず、この「正義」の代行者は話を聞いてくれるみたいです。洗脳まがいの「政府の掲げる正義」ではなく「己の正義」を強く持つ人間なのかもしれないですね。

「そこに居る親子……彼らは極めて善良な島民でございます。船内を十分に調査してからで構わないので、彼らが『悪』でないということが証明され次第、彼らの出航を許可してやってください」

全く自分の為にならないことなのに、身を挺して、土下座してまで頼み込むクローバー博士。

思わず泣きそうになりました。だが、泣いては許されません。僕はまだ3歳児、大人の話を理解してはいけませんのです。今の僕にはシラを切り、ケロッとした顔で駄々をこねる振りしかできません。しちゃいけません。

「……あの船だな、大人しく待っている」

十分程の間、波が岩に叩きつけられる音と船内の物が擦れ合う音だけが鳴り続け、屋根付きの小船の中から出て来た海軍将校の一人が僕たちの近くに居た別の将校に敬礼をして報告しに来ました。

「報告します！徹底的に搜索しましたが中で見つけられたのは、衣類や食料、書籍はその子供の鞆に入っていた2冊の絵本だけでありました！絵本もかなりメジャーな話でしたのでその学者の言う通りこちらの親子はただの一般市民かと思われます！あと、船の間という隙間にお菓子が詰め込まれてました！以上、船内報告です。」

姉、母の呆れ気味のジト目がつらい……

「そうか……ご苦労。おい、聞いての通りだ！親子3人は即刻「待ちなさい！！」まだ何かあるのか？」

これは想定内だったけどタイミングが予想外……オルビアがなんか

やらかそうとしています。

「あなた達、海軍将校のクセにわたしのことも分らないの!？」

「……どういう意味で言っている？」

「聞いた言葉の意味どおりよ! わたしはニコ・オルビア!」

そう言って目深く被っていた帽子を自ら取り払いその顔と、雪のような髪を晒す。

「その脱獄囚の罪人とお前に何の関係があるというのだ？」

「なっ……!？」

本当に何を言ってるのか分からないという顔をしている将校にオルビアが本気で困惑していました。

タネをバラすと、この島にいる全員に記憶干渉して「ここにいるオルビアと、脱獄したオルビアは全くの別人であり、相互を比較しても同一人物とは認識できない」という概念を植えつけたのです。

何を言っても、それこそポーネグリフのことを言わない限りオルビアを罪人として扱うことはありえません。しかし、それもニコ・オルビアとしてではなく、あくまでもポーネグリフを調べたイチ罪人として扱われる筈だ。

納得できない、そんな表情のままオルビアはこちらへ下がってきました。あちら側の策であったとしてもあれ以上自分の傷を広げる必要はないと判断したのだと思います。

将校や博士達はオルビアに船に乗るように催促して、僕達は将校達との距離を取りながらゆっくりと船に向かいます。

最初にオルビア、次にロビン、最後に僕。岸と船の間に架かった橋

渡しをミシミシと軋ませながら一步一步踏み締めるように足を動かします。

オルビアが船に渡り、ロビンが渡ろうとした時、後方から火薬を破裂させた爆発音が鳴りました。

「ドード中将、何をさせている？」

反射的に振り返った先にいたのは、先程まで「全知の樹」の調査に出ていた8名ほどの将校と政府役人が綺麗な鶴翼を描いて佇んでいました。

一応、というかしつかりと認識阻害に記憶齟齬をしてるから怪しまれることはない筈です。

ドード呼ばれた先程までここで指揮を執っていた将校の一人は、耳打つような距離で存在感が半端じゃない将校に状況を伝えました。

存在感が勇次郎な将校は、何度か頷くと踵を返して、クローバー博士等が固まっている方へ行きます。

勇次郎（勝手に命名）はクローバー博士に詰問してますが、状況が飲み込めないのは、どちらも同じ。

ドード中将の耳打ちが聞こえる程度に上げた聴力をもう一段階上げ、クローバー博士と勇次郎の二人にフォーカスを集中させて、心拍音を聞きます。

そしたらお二人の焦っていること焦っていること。ポーカーフェイスは作れているが、こうして見ると強がっているようにしか見えない。

悪趣味だな、もうしないでおう……くわばらくわばら

気が付けば既にロビンの乗船も済んでおり、後は僕が乗れば縄を切
って、その後の予定では「南の海」サウスフルーに移り住む予定です。

決してボロを出さない、叩かれたって意地でも埃は出さないユイス
君は、20 m程距離を開けて船に向かって「秒速3 m程度」の脚力
で船に駆け込みます。5分の3が上半身のこの身体だと、バランス
を保つためにサザエさん走りにならざるを得ません。とあるコナソ
君の身長は描写から推測すると今の僕と同じくらいのはずですが、
そこから来る身体能力は人間離れしていると思います。博士^{ひろしハカセ}博士の
慣性と力学を平気な顔して無視してるスケートボードや、12 cm
程度の大きさの靴に搭載された50%の力で数十メートル先の樹を
へし折ったりする程の出力を実現させる対人殲滅型電子兵器が拍車
を掛けてるのかもしれないが、とてもじゃありませんが

銃声。

……………あれ？

くだらない事を考えながら船に向かっていた筈なのに、いつの間
に僕は地面に伏していた。轟音が鳴り響いたのはその直前のことだ。

スがユイスがユイスがユイスがユイスがユイスがユイスがユイスが

「ユイスっ！ユイス！！い、いや！いや！いやいやいやあああああ
ああああああああ！！」

直ぐに船を降りて駆け寄ろうとしたが、今まで平然としていた海軍
の人たちがこちらを見て何かに驚いたような強張らせたような顔を
こちらに見せている。

「何故今まで誰も気づかなかった！？奴はニコ・オルビアだ！！そ
の船を出させるな！」

海軍の人がそう言う瞬間からのクローバー博士の行動は早かった。
博士は隙を見てローブを少し捲り、足首に巻きつけていた刃渡り1
5cm程のナイフを投擲して船を岸に結び付けていた縄を切る。
それにいち早く反応した海軍の人に飛び掛った博士はわたし達に向
かって言った。

「オルビア！ロビンだけでも連れて逃げるんだ！」と。

そんなことできる訳ない。そう叫び返そうとした時、わたしは少し
ずつ船と岸との距離が開いてることに気づいた。

隣にお母さんがいなかった。そして船が動いてる。この二つのこと
から案外簡単に答えは出せた。

「お、お母さん！？何してるの！岸に戻して！まだユイスが……ユ
イスが死んじゃう！」

縦帆を全体重を使って繰っているお母さんは、少し眉を顰めるだけ

で船を沖へ向かわせる。

私自身言葉になっていないような言葉をぶつける。1分間だったかも知れないし、ほんの数秒だったかもしれない。

わたしは愛しているはずのお母さんに罵声を叫び続ける……聞いて新しい爆音を再び耳にするまで。

再び音に反応して音源に目を寄せる。その間にも爆音は鳴り響いていた。

岸に見えたのはピストルを撃つ海軍の人と、バタバタと倒れていくニコライおじさん、ヴァシーリーおばさん、クローバー博士。

倒れていく研究者のみんなに目もくれず、岸に見送りに来ていた全員が掴み掛かりに駆け、そして撃たれて、斬られて、崩れる。

それを何故、とは思わなかった。

今ほどこの大人びた思考が、無ければいいと思ったことは無い。

わたしたちを逃がすため。

せめて一人でも助けなきゃと思い、海軍の人全員の足を掴み、転ばせる。

それでも数人は何事も無いように立ち上がり、研究者のみんなを殺していった。

やがて『手』の届かないところまで離れてしまったこの船で、わたしは走馬灯のようにみんなの顔をまぶたの裏に映しながら嗚咽することしか出来なかった。

そしてわたしは、1200万ベリ、お母さんは1億4100万ベリーの賞金首となった事を知った。

チャート2 間接的に賞金首になった子供（後書き）

■ディマ・ブルク・・・「金色のガッシュベル」登場の魔物「キャンチョメ」が使用する呪文。キャンチョメの分身を8体生み出す術。キャンチョメの想いの強さで分身体の強さが変わる。複数体が力を合わせれば、ギガノ級の術も押し戻せる強さを持つ。（作中では6体）

加護により、分身の数が無制限。単体でも「テオ級（ギガノ級の2段階上）」の攻撃力、耐久性があるが完全に奴のやる気次第。

■リグロン・・・フック付きのロープを使って物を持ち上げたり投げたりする術。ロープは現代の最新鋭のワイヤー（一本で家を吊り上げる）並に丈夫。

■シン・ポルク・・・「金色のガッシュベル」登場の魔物「キャンチョメ」が使用する原作中でも最強の呪文の一つ。「自由に姿を変える」「幻を作り出す」「敵の脳に直接命令を下す」と言う、キャンチョメが持つ全ての呪文の能力を同時に、かつ極めて強力な形で発動させる術。この3つの能力を組み合わせることができ、発動中は自身の肉体に想像した通りの能力を付加させることができるようになる。「空間を幻で覆うことで風景を自由自在に変える」「体の一部が標的に命中すると、標的は攻撃された錯覚によって擬似的な肉体的ダメージを負う」「発動中は姿、又は声を認識させることで相手の呪文や能力を打ち消す」「錯覚による肉体的ダメージと同時に衣服が傷付いて行く幻影を見せる事で、攻撃によって本当に物理的外傷を負ったと思込ませる」等の無敵にも見えるほどに凶悪な効果を発揮。また、精神への攻撃のため、術を解けば多少のケガや大きな疲労感が残るが、幻覚ほどの肉体的ダメージは無いが、長時間術

の影響下にあると精神が崩壊する危険性がある。

チャージル・サイフオドン・・・「金色のガッシュベル」登場の魔物「ティオ」が使用する呪文。怒りや憎しみを蓄積して攻撃力に変換する、ティオの最大攻撃呪文。形状は刀身だけの大剣を持つ女神の上半身の様な姿があり、女神の胸の水晶で出来た鏡のような部分に、それまで受けた怒りや憎しみの図が浮かぶ。その感情の昂ぶりにつれて女神の顔も凶悪になり、MAXの攻撃力は鬼でも大蛇でもない例えが出来ない程の表情、正に最凶呪文。

加護により、蓄積される怒りや憎しみが攻撃力に変換できる条件は「覚えてる限り」になったため、完全記憶能力を持つ奴が使えば一大事じゃ済まない。しかし、水晶に映る映像は誰に見せたくないため、追い詰められなきゃ先ず使うことはない。

■感知能力・・・これまた「金色のガッシュ!!」のモノ。原作中では魔物を感知する能力だったが、修正して対象は「その世界での異能」。

ONE PIECEに於いては「悪魔の実の能力者」を対象にした。今後はMS・ゴルドンウィークのような能力者ではない異能使い、「覇王色」を持つ人等はどうするか検討中……近々アンケートでも取ろうかなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4995m/>

善人的破壊活動～元・引きこもりのぶらり旅～

2011年10月7日05時20分発行